台湾原住民族伝統織物における菱形文様の分類を試みる

A STUDY ON THE CLASSIFICATION OF THE LOZENGE PATTERN IN THE TRADITIONAL TEXTILES OF TAIWAN ABORIGINE

黄　國賓　大学院芸術工学研究科　助手

Kuo-pin HUANG　　Graduate School of Arts and Design, Assistant

要旨

台湾原住民は他民族と同じようにそれぞれの種族が祖先の智慧から受け継いた固有文様を持ちながら、 他種族や外来の文化をも吸収し、多種多様な文様体系を形成している。しかし、よく見ると、それらの原住民の伝統織物の中には、かつての多くの外来文化要素が盛んに取り入れられた結果、各種族の文様の境界線がはっきりしない状態で今日まで使われている。近年、原住民の織物産業文化への復活などが、台湾の社会では話題となり注目を集めている。だが、台湾原住民種族間の織物文様は混ざりあった結果、今日の台湾原住民の織物産業推進にとって、大きな阻害となっている。そのため、現在博物館に所蔵されている全ての台湾原住民族の伝統織物を収集分析することや各種族の原住民族に現在使われている伝統織物と博物館の所蔵物と比較し、本来各族が持つべき織物の文様を明瞭化させ、体系化させていくことが重要な課題となっている。

台湾原住民族の織物の文様の中で幾何学文様は 90%を占め、ほぼ各種族の伝統織物に幾何学文様が見られる。本稿は著者がフィールドワークで収集、調査した資料に基づき、「台湾原住民族の各種族の伝統織物に見る菱形文様」を取り上げ、台湾原住民族の織物における「菱形文様」の文化観、形態観を明らかにすることを目的とする。

Summary

In recent years, the revival to the textile industry culture of the aborigine of Taiwan becomes the center of attention, and stimutate interest in the Taiwanese society now.

However, the difference of textile pattern between the races of the aborigine of Taiwan creates a mix, It has been a big problem for promoting the textile industry of today's Taiwanese aborigine.

Therefore, it is important issues to make the textile pattern clear which should be classified and systemazed.

In the pattern of the textiles of Taiwan aborigine, as for a geometrical pattern, 90% is occupied and a geometrical pattern is mostly looked at by various fellows' tradition textiles.

This research is based in the data actually collected and investigated by fieldwork, and takes up "classification of the lozenge pattern in the tradition textiles of Taiwan aborigine", It is considered as the purpose of clarifying the cultural view and form of the "lozenge pattern" in the textile of Taiwanese aborigine.

1） 先行研究と本研究における位置づけ

「台湾原住民族」に関する研究は日本統治時代から始まり、近代に至るまで多くの研究者に調査、研究されてきた。日本統治時期では主に伊能嘉矩、鳥居龍蔵（人類学）があげられる。また台北帝国大学土俗人種学研究室が 1928 年に設立されたことをきっかけに、移川子之蔵（人類学）、宮本延人、吉野清人（民俗学）、馬淵東一、鹿野忠雄（民族学）、瀬川孝吉（人類学）、千千岩助太郎（建築学）、金関丈夫、国分直一（考古学）などの学者により各分野から台湾原住民の調査、研究を行っていた。また、近代の台湾原住民族研究を代表する学者陳奇禄（芸術学、民族学）、凌純声（人類学）、衛惠林（民族学）、住田イサミ(パイワン、ルカイ族の服装学)が「台湾原住民族」に対する研究を更に系統化し、画期的な研究成果を発表した。その成果は現代においても台湾における各方面の研究の出発点として再評価されている*1)。

しかし、これらの先行研究を振り返ってみると、台湾原住民 14 族*2)の織物の文様を比較、分析する研究が、ほとんどされておらず、単一族の文様のみしか一般論で紹介されていない。

原住民の織物は、単に体を被い、装飾の機能を果たすものではなく、そこには歴史や宗教、神話、記事伝承などの要素と他種族との交流によって蓄積されてきた英知の結集である。

本研究では、デザイン学の視点から種族差によって生み出された原住民の織物にみる菱形文様をテーマに取り上げ、台湾原住民の伝統服装にある菱形文様の歴史的背景、信仰観念、各族の菱形文様における共通性、差異性、また台湾原住民族の各種族が本来持つべき菱形文様を読み解きながら、伝統的な織物のデザインが如何に原住民文化の継承に機能してきたのか、また種族との間にどのように影響し合っているかを探る。

本研究の試みは、今後研究者や台湾原住民族の社会、原住民族の伝統産業文化に還元できると考える。

2） 研究範囲

台湾原住民族の 14 族それぞれの種族に使われている織物の文様は伝統服にはじまり、織物、衣服を装飾するものに至るまで何千、何万の種類がある。時空間が限られているため、14 族の菱形文様を全て収集し、体系化することは不可能である。

本研究は台湾原住民族の織物文様を体系化するための一提案として、主に平成 21~23 年にかけて台湾現地の各部落*3)で行ったフィールドワークの資料*4)を元に纏めたものを分析の対象とする。その中には台湾博物館、台湾順益原住民博物館、国立台湾史前文化博物館、台湾昭和館、日本の天理大学参考館などの博物館に所蔵されている原住民族の織物の資料も含まれている。

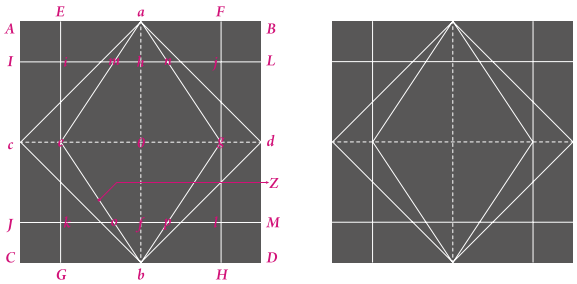


図 1） 「方形幾何構造図」(筆者作成)。

3）「方形幾何構造図」における「形態類似分類法」

平成 21~23 年に収集した台湾原住民族各種族の織物の菱形文様を図化して紙面に纏めると、数多くの文様が見られる。研究上の便宜をはかるため、本研究においては「方形幾何構造図(図 1) *5)」における「形態類似分類法」を採択する。

「形態類似分類法」とは、筆者が菱形文様を分類するために考えた、独自の分類方法である。種族、収集場所、文様の意味性とは関係なく、収集された文様の中から形態が類似するものを同じグループに集め、それらのものを同類と考え、同系統に入れる。また、同系統に入れられた各種族の類似する文様同士は、それぞれの文様構造がどんな特色を持つのかを文様の形態の構成原理の視点から比較するとともに、各種族の織物に見られた文様の地域特性、信仰観、社会観、神話伝説などを比較する。

研究対象となった各種族の織物から収集された菱形文様の形態特性から、本研究では、正菱形、菱形を二つの大きな系統として分類する(図 2) *6)。これらの二つの菱形文

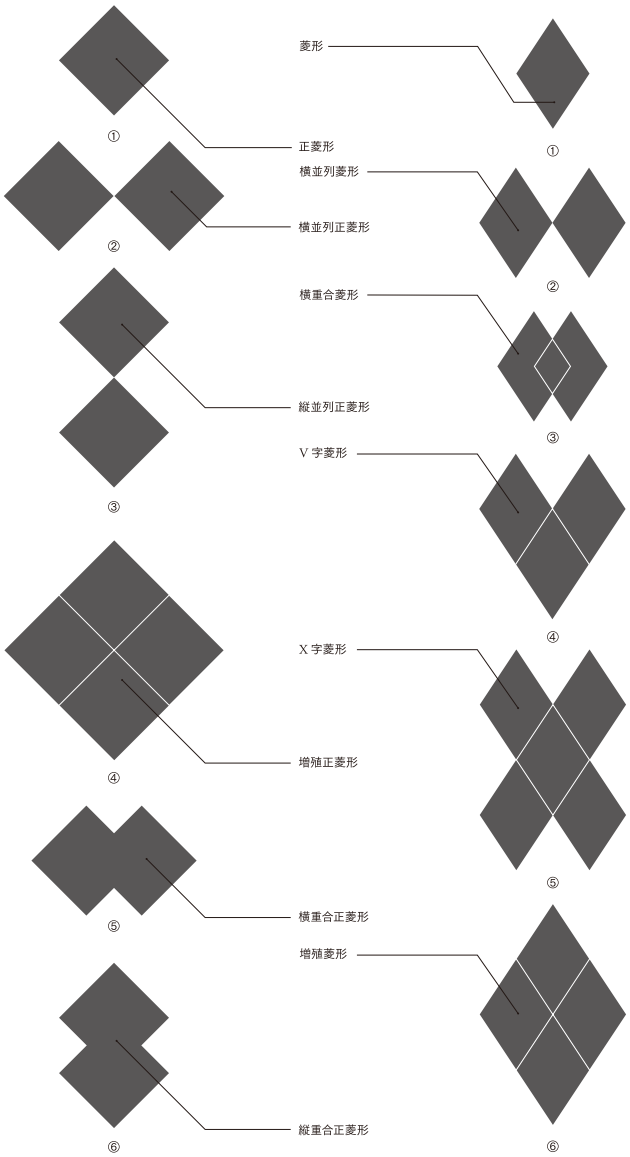


図 2)「正菱形」と「菱形」の形態に見られる文様構成のバリエーション(筆者作成)。

様系統は、文様の組み立て方によって、正菱形系統の中からさらに「横並列正菱形」「縦並列正菱形」「増殖正菱形」「横重合正菱形」「縦重合正菱形」に分類され、菱形系統の中からさらに「横並列菱形」「横重合菱形」「V 字菱形」「X 字菱形」「増殖菱形」に分類した。まず、同系としての正菱形の形態を考察する。

3-1）同系としての正菱形の形態

「方形幾何構造図」で、正菱形の形態は、点 a、b、c、d が繋がれることによって成り立っており、「方形幾何構造図」の真ん中に位置する(図 1 左)。二つ以上の正菱形を横一列に並べていくと、「横並列正菱形」の形態となり(図 2 左②)、並べ方が縦に変わると「縦並列正菱形」の形態となり(図 2 左③)、「横並列正菱形」＋「縦並列正菱形」にすると「増殖正菱形」となる(図 2 左④)。

また、二つ以上の正菱形を横に並べて、正菱形と正菱形を重ね合わせていくと「横重合正菱形」の形態となり(図 2 左⑤)、縦の位置に変えると「縦重合正菱形」の形態となる(図 2 左⑥)。

上記に述べた「横並列正菱形」「縦並列正菱形」「横重合正菱形」「縦重合正菱形」の形態は全てが「正菱形」の形態から生み出されたもので、これらの形態は「同系」の菱形に属するものと考えられる。

3-2）同系としての菱形の形態

「方形幾何構造図」の菱形は、a、e、b、g の 4 点によって構成される(図 1 左)。「菱形」を基本的なパーツとして組み立てられる形態は「横並列菱形」「横重合菱形」「V 字菱形」「X 字菱形」「増殖菱形」など五つがあげられる。

「横並列菱形」は二つ以上の「菱形」を横一列に並べたものであり(図 2 右②)、「横重合菱形」は二つ以上の「菱形」を重ね合わせることによって構成されるものである(図 2 右③)。一方、「V 字菱形」は「横並列菱形」の下に、さらに一つの「菱形」を加えることによって組み立てられたものである(図 2 右④)。また、「X 字菱形」とは「V 字菱形」の下に「横並列菱形」を加えたものであり(図 2 右⑤)、「増殖菱形」は「横並列菱形」の上下にそれぞれ一つの「菱形」を入れたもの、あるいは「V 字菱形」の上に一つ「菱形」を加えたものである(図 2 右⑥)。

以上のように、「菱形」をベースに組み立てられた様々な「菱形」のバリエーションが見られた。

4）正菱形系統における文様

調査資料に見られる織物の正菱形文様は、主にタイヤル族、アミ族、ピュマ族、パイワン族に現れ、先ほど述べた「正菱形」に帰納される「横並列正菱形」「増殖正菱形」、2 種類の文様がみられる。

図 3）正菱形系統における文様(筆者作成)。①～⑨「横並列正菱形文」。①～⑤タイヤル族/布片/推測年代：1936～1940(作者による）/范美足氏（92 才）作/宜蘭県南澳郷武塔村/取材日:2011.8.7。⑥アミ族/シャーマン用の腰下げ音具/採集年:1967 台湾東部海岸(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.4。⑦ピュマ族/男子肩掛け/採集年:1966 台東県卑南郷(参考館による）/天理大学参考館/取材日：2011.6.4⑧ピュマ族/男子たっつけ袴/採集年：1974 台東県卑南郷(参考館による）/天理大学参考館/取材日:2010.7.15⑨パイワン族/男子袖なし短上衣/使用年代：1960 頃（所有者による）/蔣梅貞/屏東縣來義郷古樓村/取材日:2010.8.13⑩タイヤル族/布片/使用年代:1972 頃(所有者による)范美足氏作/南澳/取材日：2011.8.7⑪パイワン族/男子袖なし短上衣/採集年:不明、屏東県春日郷高士村採集/天理大学参考館//取材日:2011.8.11。

4-1）「横並列正菱形文」

図 3①～⑤の「横並列正菱形」は、南澳タイヤル族の范美足氏により作られたもので、「横並列正菱形」の中にさらに 3 層の正菱形文が配されるのが特徴である。「三角並列形」(図 3①)との組み合わせや少し離れている二つの正菱形の間に見られる隙間の構図は、タイヤルの伝統文化では祖霊の顔とも言われ、二つの「横並列正菱形」は祖霊の目であると考えられていた。タイヤル族の織物にはこのような「横並列正菱形」文様が常々に見られ、人が身に纏う「横並列正菱形」文様を通して、祖霊が守ってくれると信じられていた。図 3①～⑤の「横並列正菱形」は 92 才の范美足氏の手によって作られたことから考えてみれば、おそらくそれらの「横並列正菱形」文様は、南澳郷特有の「横並列正菱形」であり、昔からずっと作られていた文様であると考える。

図 3⑥の文様は、アミ族シャーマン用の腰下げ音具から抽出された「横並列正菱形」である。その形態構図は先ほどみた図 3①～⑤の構図と似ている。それぞれの正菱形の中には同じ 3 層の構造があり、色糸が異なっている以外、ほぼ同じ構造で表現されている。アミ族はタイヤル族のような祖霊信仰がなく、また、他のアミ族の伝統織物の中にも図 3⑥のような文様も見当たらないことを考えると、図 3⑥の文様は、恐らくタイヤル族の影響で作られたものであろうと推測する。

図 3⑦⑧は、ピュマ族の伝統織物に見られた「横並列正菱形」である。ピュマ族の「横並列正菱形」の特徴は正菱形と正菱形との間の距離はやや離れ、離れた空間には正反の二つの三角形が埋め尽くされている。その正反の三角形は黒色を呈しており、その中にはさらに三つの白星のような形状が付けられているのが特徴である。ピュマ族の正菱形は既往の研究ではあまり言及されていなかったが、一説では龍の鱗だと解説されている*7)。

図 3⑨はパイワン族男子袖なし短上衣に見られたビーズ玉の繍文で、屏東縣來義郷古樓村の蔣梅貞氏により作られたものである。台湾原住民族の中で、パイワン族は百歩蛇に対する信仰が深く、「横並列正菱形」の文様が盛んに使われている。通常、パイワン族の織物文様に見られた「横並列正菱形」は、正菱形と正菱形が、隙間なく繋がっているのが特徴である。それは百歩蛇の鱗を象ったもので、昔のパイワン族の社会では、貴族の身分をもつ頭目の家系人しか使えない文様である*8)。多くの場合、ビーズ玉刺繍の技法が用いられる。

4-2）「増殖正菱形文」

「増殖正菱形文」の例を見る。調査資料では、南澳タイヤル族の范美足氏が作った図 3⑩と天理大学参考館が所蔵するパイワン族の男子袖なし短上衣に見られた図 3⑪、2 種類の「増殖正菱形文」があげられる。二つの文様は用いられた技法が異なっているが、文様の構造原理はいずれも中心から外に向けての 4 層構造で作られている。

図4左）タイヤル族北勢、南勢群族の伝統衣に見られた並列菱形文(筆者作成)。①タイヤル族/女子筒袖短上衣/採集年:1978台湾北部苗栗山地(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.24②タイヤル族/女子筒袖長上衣/採集年:1972苗栗県泰安郷錦水村/梅園郷天狗部落の柯氏所有/天理大学参考館/取材日：2011.6.24。③同上。④タイヤル族/男子たっつけ袴/採集年:1972苗栗県泰安郷、台中県和平郷(参考館による)天理大学参考館/取材日：2011.6.24。⑤タイヤル族/女子筒袖長上衣/採集年：1972 苗栗県大安溪上流(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。⑥同上。⑦タイヤル族/女子筒袖長上衣/採集年：1972 苗栗県大安溪上流(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。(以上は北勢群族)。⑧タイヤル族/男女用筒袖長上衣/採集年:不明/天理大学参考館/取材日:2011.6.24(南勢群族)。

図4右）タイヤル南澳群族、霧社群族の伝統衣に見られた並列菱形文(筆者作成)。①②タイヤル族/男子袖無し長筒衣/採集年:1970 台湾北部の山地(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.14。③タイヤル族/男子袖無し長筒衣/採集年:1969台北市(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。④同上。⑤⑥タイヤル族/布片/制作年代:1950(作者による)/範美足作/宜蘭県南澳郷武塔村/取材日:2011.8.7(以上は南澳群族)。⑦タイヤル族/霧社群族/西セディック群族/男女肩掛け衣/採集年：1978台湾北部山地の北港溪上流(参考館による)/天理大学参考館/取材日:2011.6.24(以上筆者作成)。

こうした入れ子のように何層も重ね合わせた文様の形態はパイワン族をはじめ(百歩蛇の象徴)、ピュマ族の伝統文様の中にはよく見られ、主に台湾東南部の原住民族の中に集中する。タイヤル族の伝統織物の文様の中には入れ子の構造をもつ正菱形の文様は、あまり見当たらない。図3⑩の「増殖正菱形文」はおそらくパイワン族やピュマ族の影響を受けて、タイヤル族の固有表現(タイヤル族の固有文様の特色は菱形の周りに点々の小文がある)と融合させて作られたものであろうと推測する。

5）菱形系統における「並列菱形文」

並列菱形文は主にタイヤル族やパイワン族の織物に現れ、特にタイヤル族にみた並列菱形文は地域分布や織物(衣服)の機能によって、文様が異なっており、豊富な並列菱形文が見られる。収集されたタイヤル族の並列菱形文は北勢群族、南勢群族、南澳群族、霧社群族の四つの類型があり、それぞれの特徴を以下に記す。

5-1）タイヤル族北勢群族の「並列菱形文」

図4左①～⑦の文様は、いずれもタイヤル族の北勢群族の並列菱形文である。図4左④の文様(男性専用のたっつけ袴)を除いて、すべては女子筒袖長上衣(新婦礼服）の上に見られた文様である。これらの並列菱形文はいくつかの色糸によって装飾され、華麗に仕上げられている。

これらの横(縦)並列菱形文の中には顔(図4左①)と似たものを探して見れば、人間の目に見えるようなものもある(図4左④⑤⑥)。また、音楽のような躍動的なリズム感を感じるものもあれば(図4左②③)、一定のリズムの静かな動きで配列されたものもある(図4左⑦)。

北勢群族の並列菱形文は「祖霊の目」と言われ、「祖霊の目」が多く刺された服は安全、魔除け、幸せを約束してくれると信じられている。

5-2）タイヤル族南勢群族の「並列菱形文」

図 4 左⑧はタイヤル族の男女共用の礼服から採集された文様で、南勢群族（台中県和平郷）に属するものである。北勢群族の並列菱形文よりやや地味な表現である。長く細い菱形の中には更に四つの小菱形が織り込まれ、菱形がわざわざ人の顔にみえるように作られている。

ここに見られた並列菱形文も一種の祖霊の顔の表現ではないかと推測され、北勢群族の並列菱形文とはっきり異なっている。

5-3）タイヤル族南澳群族の「並列菱形文」

南澳群族の並列菱形文の特徴を見る。南澳群族の並列菱形文の形態は、一見してパイワン族の並列菱形文と似てるように見えるが、菱形文の中の菱形文はさらに装飾され、(図 4 右①～②)重層化され(図 4 右③～⑥)、菱形と菱形との配列が一定の規律で並べられているのが特徴である。北勢群族のような複雑で、華やかな菱形文ではないが、装飾性は南勢群族より強い。

5-4）タイヤル族霧社群族の「並列菱形文」

本研究の調査対象の中でタイヤル族の霧社群族に属する並列菱形文と判断されるのは図 4 右⑦のみである。中心から外に向けて徐々に拡がっていき、六層構造になっている。形態としての構造から見ると上述した北勢群族、南勢群族、南澳群族の並列菱形文の表現と全く異なっている。本例は、西セディック族に属する織物に見られた文様で、タイヤル族よりセディック族の風格に近く見える。

5-5）パイワン族の「並列菱形文」

パイワン族の並列菱形文は主に屏東県春日郷の帰崇村、来義郷古楼村に分布し、女子肩掛け衣、女子頭披衣、忌中の家の女性喪衣に現れている。パイワン族の並列菱形文は縦並列菱形文＋横並列菱形文(図 5①)、縦長並列菱形文(図 5②)、縦長並列菱形文＋三角並列形文＋頭髪文(図 5③)、縦長並列菱形文＋頭髪文(図 5④)と、四つのタイプが上げられる。タイヤル族の並列菱形文と比べ、パイワン族の並列菱形文の構造は隙間なく菱形文が埋め尽くされている

図 5）パイワン族の並列菱形文。①女子肩掛け/採集年:不明、屏東県春日郷高見村採集/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。②女子肩掛け衣/採集年:不明、台湾屏東県春日郷の帰崇村採集/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。③女子筒袖長衣/制作年代:1912頃（所有者による）/蒋梅貞作/屏東県來義郷古樓村/取材日:2010.8.13。④女子頭披/制作年代:1912 頃(所有者による)/蒋梅貞収蔵/屏東県來義郷古樓村/取材日:2010.8.13(以上筆者作成)。

のが特徴である。菱形文は、パイワン族にとって百歩蛇の鱗を象ったものであり、擬人化された祖先(百歩蛇)の顔でもある。パイワン族並列菱形文はタイヤル族の並列菱形文のような多彩な変化はないが、祖先である百歩蛇に対する敬意が文様化され、落ち着いた手法で表現されている。

6）菱形系統における「V 字菱形文」

台湾原住民族の織物文様に見る V 字形の文様は、主にパイワン族の織物に現れている。図 6 の全てはパイワン族を代表とする V 字形のカタチであるが、パイワン族男性用の短上衣、あるいは女性喪装用の浮織方布、肩掛けなどに現れ、主に屏東県泰武郷佳興村、春日郷の帰崇村、土文、高見村及び同県の三地門郷で使われていた。

そのカタチの構成原理は次の通りである(図 7 左)。真ん中に隙間が開いており、その左右には二つずつ小正菱形が配され、左右正菱形の脇からはさらに線が引かれ、2 本の線の交叉するところは 90°(上下の角は 90°より大きくする場合もある)となり、全体のカタチは V 字形の形状となる。同じ構造のものがさらに逆さに配置され、二つのものが一対になって、繰り返して並べられている。

その構図は多く見られるが、例えば台湾順益原住民博物館に所蔵されているパイワン族の女性喪装用の肩掛けのように四つが一組となる組み立て方も見られる(図 7 右)。

6-1）百歩蛇の頭を象った V 字形文様

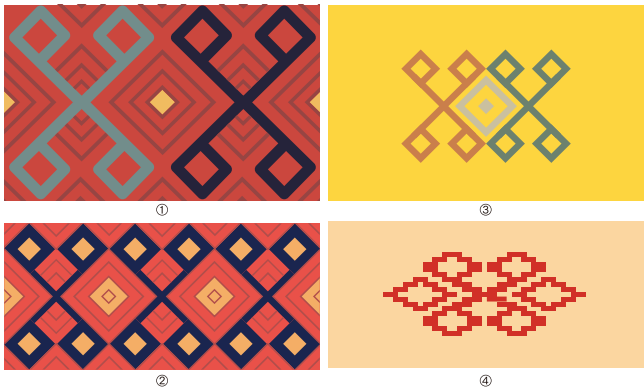


図 6）菱形系統におけるパイワン族の「V 字菱形文」。①女子頭披衣/採集年:不明/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。②男子袖なし短上衣/採集年不明、台湾屏東県春日郷の高士村/天理大学参考館/取材日:2011.6.24。③男子筒袖短上衣/採集年不明/昭和館/取材日:2011.12.25。④男子筒袖短上衣/制作年代:1932 頃(所有者による)/陳俄安氏所有/屏東県三地門郷三地村/取材日:2010.8.16(以上筆者作成)。

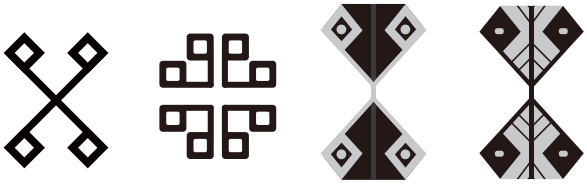


図 7）V 字形文の構成原理　図 8）百歩蛇の頭を象った V 字形文様

図 7(左)パイワン族/女性喪装用の肩掛け/天理参考館。図 7(右)パイワン族/女性喪装用の肩掛け衣/台湾順益原住民博物館/採集年:不明/取材日：2011.12.25(筆者作成)。

図 8）パイワン族/男性たっつけ袴/採集年:1972(所有者による)/陳澄晴氏収蔵/取材日:2011.6.27(筆者作成)。

図 9）（左）パイワン族/男子筒袖短上衣/採集年代不明、屏東県来義郷白鷺村/順益台湾原住民博物館/取材日：2011.12.25。（中）パイワン族/男子ビーズ刺繍文袖無し短上衣/採集年不明、屏東県三地郷三地村/天理参考館/取材日:2010.7.15。（右）パイワン族/男性用切伏文短上衣/採集年不明/天理参考館/取材日:2010.7.15(以上筆者作成)。

奇怪な V 字形文様の形態は、パイワン語で kerlay と呼ばれ、かつては貴族家系の人しか使えなかった。その文様はなにを意味するのか、図 8 の形態構成を考察する。

図 8 の文様はコレクター陳澄晴氏が収蔵しているパイワン族の男性たっつけ袴に見られた文様である。この文様は V 字形文様よりさらに具象化されている。上述した V 字形の構造に見る左右二つの小正菱形がここでは目のカタチとして表現されていることが分かる。小正菱形のカタチはさらに頭のカタチと組み合わせると蛇の頭が浮かびあがってくるではないだろうか。蛇はいうまでもなくパイワン族の固有文化で信仰されていた百歩蛇である。

そう考えてみると図 8 は百歩蛇の頭を具象化したものであろう。図 8 は百歩蛇の頭であるならば、V 字形文様は即ち抽象化された百歩蛇の頭を象ったものであると推測することができる。

一方、図 9(左)は、順益台湾原住民博物館が収蔵している男子筒袖短上衣に見られた文様である。それと似た文様は天理参考館が所蔵している男子用の切伏刺繍文短上衣(屏東県来義郷白鷺村)、男子用のビーズ刺繍文袖無し短上衣（屏東県三地郷三地村）にも現れている(図 9 中)。いずれの構造も丸く、ハートのカタチをしている。そのカタチは V 字形文様とやや異なっているが、これらも百歩蛇の頭を象ったものであると考えられる。

しかし、ハートのカタチをする V 字形の文様は単に百歩蛇の頭を象ったものではない。

図 9(右)は、天理参考館の男性用切伏文短上衣の背中に見られた文様である。ここでみたハート形の V 字形文様は、上述の図 9(中)にみた小正菱形と同じような目が付けられているほか、ハート形の二つの丸い球状部分に更に目、口、鼻が刺され、人の顔を作り出している。

こう考えてみると V 字形文様は、パイワン族にとっては百歩蛇の頭を象ったものであると同時に祖先(百歩蛇)でもあると読み取れる。パイワン族のハートの V 字形文様を百歩蛇として、または祖先として表現するという考え方は、実は近隣に住むピュマ族にも影響を及ぼしている。

例えば図 10(左)は、天理参考館に所蔵される台東県卑南郷ピュマ族女性が喪服用に使った前掛け(写真 1)に見られ

た人像刺繍文である。この人像刺繍文の形態は、横に肘を折って肩まであげ、蟹股で両足を外側に向けている。その構図は魏徳文氏が屏東県牡丹郷牡丹村で購入したパイワン族の筒袖短上衣にみた人像文の構図と全く同様である(図 10 右)。

上述した人像刺繍文の「肘を折って肩まであげ、蟹股で両足を外側に向けている。」の特色は、主に南パイワン族の伝統彫刻や衣服に多く使われ、南パイワン族を代表する表現手法としてよく知られている(図 11)。

一方、特に注目したいのはピュマ族女性の喪服用の前掛けに見た頭文様、そして両手の先に捧げもつ人頭文の全てがハートの V 字形で表現されていることである。これは先ほど述べたパイワン族のハート形の V 字形文様の意味と重なっている。

パイワン族のハート形の V 字形文様について、先行研究の『台湾原住民の服飾』の中では「それはパイワン族伝統モチーフとして用いられ、主に屏東県來義郷白鷺村、屏東県三地郷三地村に分布している」と書かれている*9)。

以上の 2 点から、明らかにハート形の V 字形文様はピュマ族の固有文様ではなく、近隣に住むパイワン族の影響を受けて作られたものであると考える。

7）菱形系統における「X 字菱形文」

台湾原住民族の織物に見られた X 形は、多くの場合、タイヤル族の新婦の婚礼衣裳に見られ、少数だが、かつてタイヤル族の中に入ったセディック族の「ミリ織」にも表れている。図 12(①②③④)のいずれも天理参考館に所蔵される苗栗県泰安郷錦水村の新婦の婚礼衣裳に施された文様であり、多彩なバリエーションがある。それぞれの文様の特徴を見る。

図 12①の X 形の文様は、婚礼衣裳の前の下部に見られた黒の毛糸で織られた横縞文様である。X 形の文様の両側には二つ菱形が配される。菱形の外側から中をみると茶褐色、青色、ピンク色、茶褐色、白色の菱形があり、それはタイヤル族の固有伝統文化に見られる「祖霊の眼」であろうか、前方の何かを見つめているように見える。

一方、図 12②の X 形は、婚礼衣裳の後ろの下部に

図 10）（左）ピュマ族/女性用の前かけに見る人像文/採集年不明、台東県卑南郷/天理参考館/取材日：2010. 7. 15(筆者作成)。
(右)パイワン族/男子族筒袖短上衣/採集年:1983 屏東県牡丹郷牡丹村/使用年代:1950～1960(所有者による)/魏徳文氏収蔵(筆者作成)。

写真 1) 台東県卑南郷ピュマ族の女性が服喪に使った前かけ/採集年不明/天理参考館/取材日:2010.7.15(筆者撮影)。

図 11)南パイワン族の伝統服にみられる「肘を折って肩まであげ、蟹股で両足を外側に向けている」人像文(筆者作成)。

図 12) ①②③④タイヤル族/新婦婚礼衣裳/採集年:1979 苗栗県泰安郷錦水村(参考館による)/天理参考館所蔵/取材日:2011. 6. 4。⑤タイヤル族の霧社群族（西セディック族）/男女肩掛け/採集年:1978、台湾北部山地の北港渓上流(参考館による)/天理大学参考館所蔵/取材日:2011. 6. 24(以上筆者作成)。

見られた横縞文様である。X 形文様は、二つの菱形の真ん中に配置され、その二つの菱形の上下には二つずつの球状のものがあり、左側の菱形の右には燕尾に似たものが付けられ、右側の菱形の左にある燕尾形と対応し合う。また、主役の X 形の中心部にはやや横長の赤色の四角形があり、その両側には黒糸で織り込まれている「>」「 <」、二つの形状があり、「>」「<」は X 形を形成する。さらに、この X 形の周囲にはピンク、緑、オレンジ糸で囲まれ、三色の X 形となっていき、その縁にはさらに黒糸で織り込まれ大きな X 形を形成する。

図 12③の構造原理は菱形を中心に、その上下の左右の部分が三角形で囲まれているのが基本の構造である。二つの三角形の頂点同士を向かい合わせることにより形成されている形状は X 形となる。この X 形は上述の二つの X 形と同様、新婦の婚礼衣裳の筒袖に現れている文様で、白点の小文様が多数ちりばめられているのが特徴である。

図 12④も同衣裳に見られた X 形文様で、主に袖口に施されている。その中心部に縦に並んでいる二つの赤い菱形があり、上下の部分には V と逆 V を向かい合い、X 形を形成している。

図 12⑤は「ミリ織」と呼ばれるセディック族の織布に織り込まれた文様であり、X 形は二つの変形六角形の真ん中に配される。一点を単位とする織り方は一点一点を重ね合わせることによって、点から線の形態を形成していき、線と線との間の隙間が均等分されることにより、細かな文様を特徴に仕上げられている。

図 12⑤の「ミリ織」に見た文様の形態特徴は、上述の新婦の婚礼衣裳に見た文様の特徴とは明らかに異なっている。これらの文様が苗栗県泰安郷錦水村のタイヤル族のものであるのに対して、「ミリ織」は主に南投県仁愛郷に分布するセディック族のものである。

8）菱形系統における「増殖菱形文」

四つ以上の同形態を持つ菱形文が上下左右に均等に配列され、菱形文と菱形文とが繋がることによって広がってゆく一面の縞文に対して、筆者はそれを「増殖菱形文」と名付ける。「増殖菱形文」を構成する基本のカタチは菱形文であり、菱形文が使われている種族の織物にはほぼ「増殖菱形文」が見られると言える。

過去 3 年間の台湾原住民族の織物の調査資料の中で、「増殖菱形文」を使う種族としては、タイヤル族、サイシャット族、ブヌン族、ピュマ族、ルカイ族、パイワン族などがあげられる。これらの種族では、ルカイ族とパイワン族の生活文化が近いため、「増殖菱形文」の意味や形態の表現が似ているが、その他の種族における「増殖菱形文」の表現は、種族の個性や信仰によって異なっている。まず、タイヤル族の「増殖菱形文」の特徴を見ていく。

8-1）タイヤル族の「増殖菱形文」

図 13(左)はタイヤル族の男子筒袖長衣に見られた「増殖菱形文」文様の一部である。タイヤル族の伝統「増殖菱形文」としてよく知られている。1965 年中央研究院民族学研究所により南投仁愛郷中央村で採取され、1930 年～40 年ぐらいのものと言われている。

この「増殖菱形文」の中心には四つの正菱形が上下左右に配置され、それぞれの正菱形の中はさらに白糸で区切られ、3 層構造となる。四つの正菱形を巡り、その周囲には斑点文が均等に配され、斑点文の上下左右には更に中心部と同じような 3 層構造をもつ正菱形文が置かれ、正菱形文と正菱形文との間には四つの横長の横縞文が配される。こ

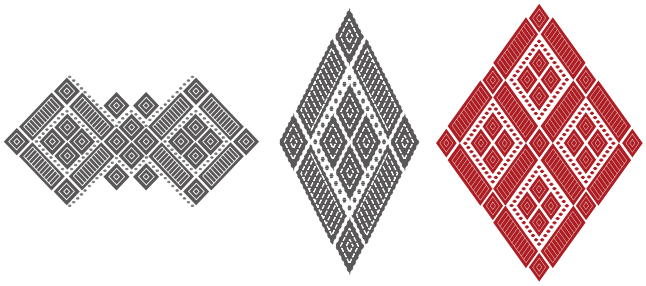


図 13) タイヤル族の増殖菱形文。(左)タイヤル族/男子筒袖長衣/採集年:1965 南投県仁愛郷中央村/使用年代:1939～1940(研究所による)/中央研究院民族学研究所所蔵/取材日:2011.12.24。
(中)タイヤル族/男子筒袖長衣/使用年代:1950～60（博物館による）/台湾順益原住民博物館所蔵/取材日: 2011.12.25。
(右)タイヤル族/男子袖無し長筒衣/宜蘭縣南澳郷南澳村/制作年代：2000(作者による)/彭秋玉氏作（敏都奴織芸工作坊）/取材日:2010.12.28(以上筆者作成)。

うした一つ一つのパーツ文様で組み立てられたものは「増殖菱形文」を構成する基本文様となり、それが繰り返されることによって、タイヤル族の特色をもつ文様が作られていく。

上記に取り上げた「増殖菱形文」に見る形態は、正菱形文を基本パーツとした組み立て構造があげられるが、図13(中)のような菱形文を「増殖菱形文」の基本単位とするものも見られる。

図 13(中)の菱形文は 1950~1960 年頃に使われたものと推測され、台湾順益原住民博物館に収蔵されているタイヤル族男子の筒袖長上衣に見られた「増殖菱形文」の一部文様である。そのカタチはやや細長い菱形に見えるが、全体の文様の構成原理は上述の文様と変わらない。

一方、図 13(右)の菱形文は、宜蘭県南澳郷の彭秋玉氏により作られた男性袖無し上衣に見られたものである。現代のものだが、「増殖菱形文」の構図の構成原理は順益原住民博物館の筒袖長上衣に見た文様とあまり変わらない。

なぜ、タイヤル族の「増殖菱形文」の構造は昔とあまり変わらず、現在まで続けて作られているのか。それは、菱形文がタイヤル族にとって、深い意味があるからだ。一般論ではタイヤル族の菱形文様を象徴する意味について、次のように語られている。「タイヤル族の衣の前には多くの場合、単一の菱形文が織り込まれ、それは「祖霊の目」を象徴するもの、護るものとしてみなされていた。一方、背中には常に複雑な文様が使われ、それは悪魔を祓うことができると信じられている。」

また、「タイヤル族の菱形文様の回りに光芒が見られるのは、二つの意味があると考えられている。一つは眩しい太陽の光を象徴するものであり、転じて「団結は力である」という意味合いも含まれている。また、多重の菱形は即ち、族人が団結すべき意が含まれ、徐々に大きくなる同心円は即ち団結の力が外へ拡大してゆく象徴であると言われている」*10)。

タイヤル族の菱形文は単に装飾の美を追求するだけではなく、複雑な文様の背後に深い意味が含まれていた。それこそが、文様が生き続けられた最大の理由であろう。

8-2）サイシャット族の「増殖菱形文」

サイシャット族語で菱形文が織り込まれている布は、hinihalos と呼ばれ、衣服における文様の配置場所によって、その呼称や使用者が異なっている。例えば、胸部以下に全ての文様が施されたものは 30 才以上の男女しか着ることができない。また、サイシャット族が祭祀時に使う長衣の上半部は、必ず白で、それは、善良を表す意味である。赤を中心とする文様が中間部に配置され、それは元気いっぱい、幸福な生活を表している。文様の縁には黒色が用いられ、それは腹黒くならないという意味を表している*11)。

サイシャット族の衣服の文様に対して、様々な使い方や解釈が見られる。タイヤル族の近隣に住んでいるため、サイシャット族の「増殖菱形文」の構成原理はタイヤル族と似ている。

図 14(左)は国立台湾史前文化博物館に収蔵されているサイシャット族(新竹県尖石郷)の男性袖なしの長上衣に見られた「増殖菱形文」の一部文様である。白糸で区切られた四つの小菱形が中央の部分に一つの大きな菱形文を形成し、それを中心としてさらにその上下左右の部分に同じ構造原理を持つ菱形文が配される。そして、菱形文と菱形文との間には 2 本ずつ横に長い縞文が配され、その縞文

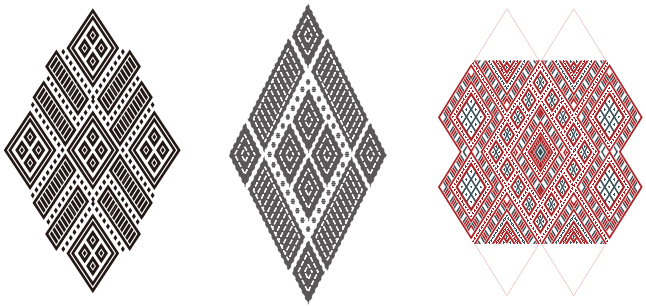


図 14）(左)サイシャット族/男性袖なし長上衣/採集年不明、新竹県尖石郷/国立台湾史前文化博物館収蔵/取材日:2007.11.27。(中)タイヤル族/男子筒袖長衣/使用年代:1950～60(博物館による)/台湾順益原住民博物館所蔵/取材日: 2011.12.25。(右)サイシャット族/男子袖無し長上衣/採集年不明/彰化県芬園郷昭和文物館所蔵/取材日:2010.12.25(以上筆者作成)。

の上にはまた白糸を用いて均等分で刺繍され、横縞文と横縞文との間には再び均等分の斑点文が織り込まれている。

このような複雑な文様を一つの基本的な構成パーツ文様としてサイシャット族の「増殖菱形文」が作り上げられていく。

サイシャット族の「増殖菱形文」をよく見ると、台湾順益原住民博物館のタイヤル族男子の筒袖長上衣に見た「増殖菱形文」(図 13 中)と似ている。菱形を囲む横縞文は、タイヤル族の 1 層構造に対して、サイシャット族は 2 層構造が作られ、全体の「増殖菱形文」はタイヤル族より複雑に見える。

一方、図 14(右)は彰化県芬園郷昭和文物館に所蔵されるサイシャット族の男子袖無し長上衣の背中に見られた「増殖菱形文」の一部である。その中心部には一つの大きな菱形文が置かれ、その両側には二つずつの「縦並列菱形」が配されている。特に注目したいのは中央の大菱形の中心部に赤糸で埋め尽くされた菱形である。この顕著な菱形はまるで「増殖菱形文」全体の中枢部のように前方をじっと凝視している。

サイシャット族は 2 年に 1 回行われる「矮人祭」の祭典でよく知られている。「矮人祭」を行う際にダンサーたちは盛装服を身に纏い、手と手をつなぎ、背中を観賞者に向けて、祝辞を詠いながら輪を作る。彰化県芬園郷昭和文物館の男子袖無し長上衣に見た「増殖菱形文」が複雑に作られた理由は、見る人に観賞してもらうだけではなく、矮人の魂をも喜ばせるためであると考える。

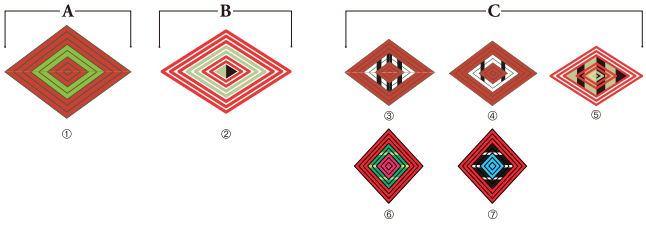


図 15）ピュマ族に見られた「増殖菱形文」 は、A、B、C の 3 タイプに分類される(筆者作成)。

8-3）ピュマ族の「増殖菱形文」

ピュマ族の「増殖菱形文」は主に図 15 のような菱形パーツで構成される。これらの多層菱形文は、ピュマ族語で kadilinang と呼ばれ、赤、緑、或いは黄糸が黒、白糸と混ぜられてピュマ族独自の菱形文を作り上げていく。

ピュマ族の固有文化には百歩蛇に対する信仰はなく、ピュマ族に見られた菱形文は、百歩蛇文とは言えない。「昔我々の祖先は、清の皇帝からピュマ王の称号を受け、清からの服を授けられた。それ以後のピュマ族の男性が着けた服は「龍袍」と呼ばれ、服にある菱形文は即ち龍の鱗であった。」とピュマ族は自族の菱形文に対して語ってくれた[*12)]。

ピュマ族の「増殖菱形文」の多くの場合は、男子用のたっつけ袴、肩掛け、女子用の腰巻きに現れ、「増殖菱形文」を構成とする基本の菱形文は A、B、C の 3 タイプに分類される。それぞれの特色を以下に記す。

A タイプ

基本的には赤、緑の 2 色が使われ、中心から外に向けて菱形が均等に広がっていく。また中心から数えるとおおむね第 4 層や 5 層部分に緑が施される。

B タイプ

基本的には赤、薄緑、黒の 3 色が使われ、 中心から外に向けて、菱形が均等に広がっていく。また、中心から数えるとおおむね第 4 層や 5 層部分に薄緑が施される。ここまではほぼ A タイプと同様の構造であるが、B タイプの

図 16）A+C 型の増殖菱形文。ピュマ族/男性用たっつけ袴/採集年:1966 台東県卑南郷(参考館による)/天理参考館所蔵/取材日:2011.6.24(筆者作成)。

特徴は中心の小菱形が分割されており、その小菱形の半分が薄緑で、半分が黒にされていることである。

C タイプ

C タイプの菱形文は、赤、黒、白や、赤、黒、薄緑や、赤、緑、黄や、赤、黒、青など配色は異なり、それぞれの構造原理もやや異なっているように見える。各菱形文の構造の中には縞文が付けられているという特色からそれらを C タイプに同属させることにする。

A、B、C の 3 タイプの菱形文を組み合わせることによって、ピュマ族の「増殖菱形文」を構成する。本研究では A、B、C の 3 タイプをさらに、A+C 型、B+C 型、C 型の増殖菱形文に分類する。

8-3-1）A+C 型の「増殖菱形文」

図 16 は天理参考館が所蔵する男性用のたっつけ袴に見られたもの。上述の A タイプと C タイプを組み合わせたものである。台東県卑南郷のものであり、はっきりした村名は不明である。C タイプ菱形文に見られる縞文は何故、2 本と 3 本で表現されるかも不明である。

8-3-2）B+C 型の「増殖菱形文」

図 17(左)(右)は台湾順益原住民博物館所蔵の男子用のたっつけ袴に見られたものと天理参考館所蔵の男性用の肩掛けに見られた「増殖菱形文」である。いずれの文様の織り方も非常に繊細であり、恐らく頭目系の人に使われていたものであろうと考える。「増殖菱形文」の特徴から見ると B+C 型の典型的な表現である。両者の構成原理が非常に似ていることから、恐らく両者の産地も非常に近いと考

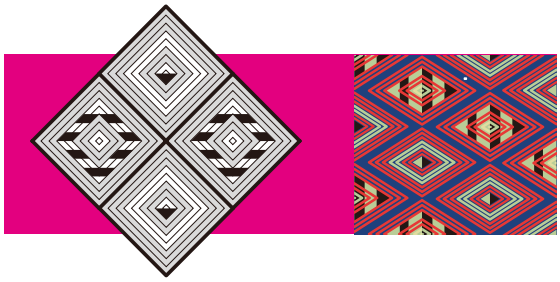


図 17）B+C 型の増殖菱形文。(左)ピュマ族/男子たっつけ袴/採集年:不明/台湾順益原住民博物館所蔵/取材日：2011.12.25。(右)ピュマ族/男性肩掛け/採集年:1974 台東県卑南郷（参考館による）/天理参考館所蔵/取材日:2010.7.15(以上筆者作成)。

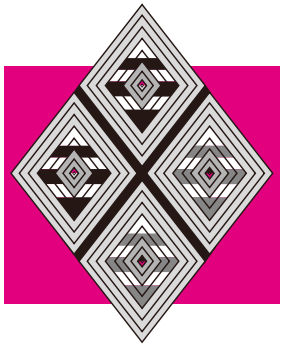


図 18）C 型の増殖菱形文。ピュマ族/男子肩掛け/採集年:不明/陳澄晴収蔵/取材日: 2007.11.27(筆者作成)。

える。但し、台湾順益原住民博物館所蔵の男子用のたっつけ袴に現れている C タイプの縞文は、天理参考館所蔵の男性肩掛けに見られた C タイプの縞文よりは一本黒線が増えている。それには意味があると筆者は推測するが、今回のフィールドワークの調査ではピュマ族に確認しても分からなかった。

8-3-3）C 型の「増殖菱形文」

図 18 は台湾の原住民族のコレクターである陳澄晴氏が収蔵している男子用の肩掛けに見られた「増殖菱形文」の一部である。「増殖菱形文」を単に C タイプの菱形文のみで構成しているかなり珍しい例である。

C タイプの菱形文には縞文がそれぞれ 3 本あり、第 3 本目の部分が逆三角で表現されているのがこの「増殖菱形文」の注目すべき特徴である。筆者は C 型の「増殖菱形文」が A+C 型、 B+C 型と異なっている理由は産地もしくは持ち主の社会階級と関わっているからではないかと

考える。

8-4）ブヌン族の「増殖菱形文」

以上、タイヤル族、サイシャット族、ピュマ族の「増殖菱形文」の特性を考察した。次に、ブヌン族の「増殖菱形文」の構造原理を探る。

菱形文は百歩蛇の背の kavihyeano 鱗文を表し、三角文はその変化、正方形連続文は百歩蛇の腹部の鱗であるとブヌン族には伝えられている。ブヌン族は百歩蛇を後述のパイワン族のように祖霊として祀ることはしないが、非常に畏敬し危害を加えることはしない。もし、危害を加えれば次は必ず噛まれると信じている。百歩蛇の表象文を衣服の背中に横縞として見せるのは死霊(ハニト）の攻撃から身を守るためであると言われている。

また、ブヌン族は菱形文に関して次の伝説を持つ。昔、百歩蛇の子供を親から借りてきて、菱形文を作ることを教わった。約束の時間が過ぎても帰さなかったので、親の百歩蛇が腹を立て、一村残らず攻撃したという*13)。

図 19 は天理参考館が所蔵するブヌン族男性用の浮織文胸当てに見られた「増殖菱形文」の一部である。その基本のパーツ文様は図 19(左下)のとおりであるが、中心から外に向けて、3 層の構造で仕上げられている。赤毛糸をベースとする菱形の第 1 層、第 2 層の縁には、それぞれ橙、黒糸ないし黒、橙糸が織り込まれ、二種類の配色の菱形文は上下交互に並べられ、「増殖菱形文」を作り出していく。百歩蛇の背の鱗文を象ったブヌン族の「増殖菱形文」は上述したタイヤル族、サイシャット族、ピュマ族、後述のルカイ族、パイワン族の「増殖菱形文」より、シンプルな構造が取られているのが特徴である。

8-5）パイワンとルカイ族の「増殖菱形文」

台湾原住民族の「増殖菱形文」の集大成でもあるパイワン族とルカイ族の「増殖菱形文」の構造原理を象徴する意味について考察する。

パイワン族とルカイ族はどちらも貴族と平民の階級に分かれている。百歩蛇と太陽のトーテムを崇め、それらが貴族の象徴とされる。台湾の少数民族の中で蛇をモチーフ

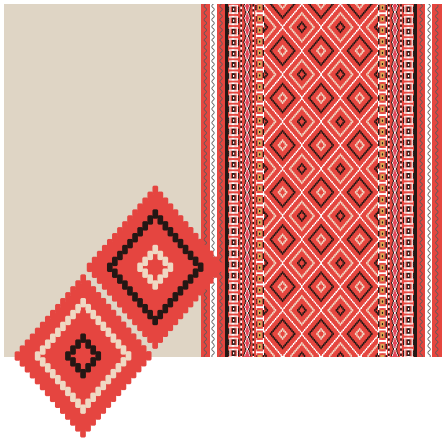


図 19）ブヌン族の「増殖菱形文」。ブヌン族/男性浮織文胸当て/採集年:1978 台湾中部山地(参考館による)/理参考館所蔵/取材日：2011.6.24(筆者作成)。

とした始祖神を祭ったのは、パイワン族とルカイ族のみである。パイワン族は、自らの祖先は蛇から生まれたと思っており、またルカイ族には蛇と人間の娘との結婚により民族の始祖が誕生したという神話があり、住居や衣服に描かれる百歩蛇、太陽文様は、頭目を中心とする集団的アイデンティティの核を成す重要な文化表象であるという。

8-5-1）百歩蛇のトーテムを崇める民

百歩蛇はクサリヘビ科の毒蛇。全長約 80～120cm。体は太く、灰褐色の地に暗褐色の三角形の斑文が並ぶ。この斑文は落ち葉の中では保護色になる。鱗には隆起（キール）が入る。頭部は三角形で大きく口先がとがりやや上方に曲る。目は金色で細い縦長の瞳を持つ。台湾・中国南部などに分布。上あごに管状の長大な毒牙を持ち、噛まれると百歩行かないうちに死ぬ …*14)。

百歩蛇をパイワン族はタサラ（tasalad パートナの意）、カナワナヌ(KanaVanan 正に、本当の意)、カブルンガン（kavulungan 祖先の意）、ラマバラン（kamabanan 長老）、ルカイ族はパタダ（patada パートナの意）、アマニ（Amani 彼の意）、マルドラン（Maludran 長老の意）と呼ぶ。

百歩蛇は毒蛇にもかかわらず、上記の呼称から両族にとって、友のような存在と思われている。古来よりパイワン、

ルカイ族の社会階層を示す文章の中で百歩蛇の文章は、特に重視され使用は頭目家にしか許されない。

百歩蛇はパイワン族にとって祖霊の象徴であり、伝説によるとパイワン族は百歩蛇の後裔だと言われる。百歩蛇はパイワン族社会の神聖な地位を固めるためのシンボルでもあり、階級社会を強化させる機能を具有している。現在、彼らの家屋中の柱、桁、寝台の縁、天井、伝統服刺繍、ビーズ玉装飾などにも三角形、菱形、方形、網状文など抽象化された百歩蛇の文様があちらこちらに見られる。

なぜ、パイワン、ルカイ族の社会において、百歩蛇は聖なる動物と見なされていたのか。パイワン族群のいくつか百歩蛇に関わる神話の中に窺える。

佳平部落の神話

「太古、洪水が氾濫し、全ての人類、動物が死んでしまった。ある日、一人の神霊様が山頂にて蛇の卵を見つけた。奇怪と思われた瞬間、神霊様の目から光が放出され、透かして蛇の卵をみると、人の形をしたものが見えた。間もなく、その卵は太陽光によって破れ、人が生まれた。その後、彼はパイワン族の貴族の祖先となった。」また、同じ佳平部落の伝説であるが、「太古、大武山の中に多くの竹があり、ある日、その中の一本の竹が破れ、その中から多くの小蛇が生まれた。それらの小蛇が大きく成長すると人間に変り、パイワン族の祖先となった*15)。」とある。

達得勒（ダテラ）部落の神話

「昔、 村にバラン姫という妙齢の女性が住んでいた。どうにかして父の怪我を治せるようにと、ある日、バラン姫は、薬草を採りに聖地である大鬼湖まで来て百歩蛇神の美しい笛音に惹かれ、お互い一目ぼれし、恋に落ちた。普段、世間の前で、蛇神は、巨大な恐ろしい百歩蛇だが、バラン姫と出会えたおかげで、素敵な青年に変身した…。やがて二人は結婚して、生まれたのがルカイ族の子孫である*16)。」

パイワン、ルカイ族の祖先は蛇から生まれたという伝説神話から、蛇は聖なるものであり、特に百歩蛇は権力を象徴するものとして頭目の祖先と位置づけたと思われる。

8-5-2）菱形百歩蛇文に隠されていた意味

写真 2）三地門郷の陳俄安氏が所有するパイワン族大頭目の長袖短衣/制作年代:1910～1920（所有者による）/取材日:2010.8.16。

写真 2 は三地門部落に見たパイワン族男性頭目の伝統服である。首ぐり、前打合、肩、袖口、背中、両脇の部分にサテン・ステッチで刺繍して巧みに仕上げている。よく見るとサテン・ステッチで刺された文様は菱形のカタチをしており、上下左右に列を成して広がっていく。刺繍されている菱形は百歩蛇の頭であり、それぞれの菱形の上下は山形状の黄糸で区切られている(図 20)。

また菱形の 4 辺を刺している糸はパールグレーとオレンジ色のものがある。さらにその菱形の真ん中には黒に見える五つの隙間の開いた点があり、その上下は［ ］で、左右は┃┃で囲まれており、その上下左右の空間はパールグレーとオレンジ色の糸で充填され、菱形百歩蛇文が構成されている。

上下左右に連続して列を成している菱形を一つ取り上げて見ると、図 21(左)のようなカタチが見えてくる。そのカタチを中央に横線を引いて、百歩蛇の頭部図 21(右)と照らし合わせて見ると、それは真上から俯瞰してみた上下背中合わせにした二つの抽象化した百歩蛇の頭のカタチと分かる。この構造の上下左右のバランスがよく保たれていて、完全な百歩蛇頭文と言える。一説ではこの百歩蛇の頭の奥の菱形の色がパールグレー、緑色のものは雄、オレンジ色、赤色のものは雌と言われる*17)。

さて、パイワン、ルカイ族群の頭目の身分を象徴する菱形文は上述したもの以外、図 22①のようなカタチも見られる。

図 22①は、奈良天理参考館に所蔵されているパイワン族男性頭目の伝統服である。構造は三地門で見たパイワン族頭目の伝統服と近似するものであるが、菱形はやや異な

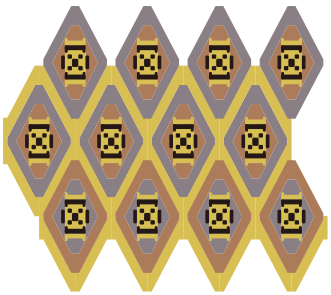


図 20）パイワン族陳俄安氏の大頭目衣服に刺繍された文様(筆者作成)。

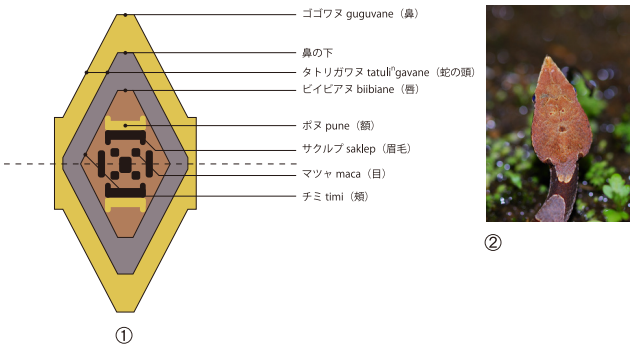


図 21）左：大頭目服の菱形文構造原理と百歩蛇の頭部との関係比較。右：台湾百歩蛇(筆者作成)。

っている(図 22②③④⑤)。同じ百歩蛇の頭部のカタチであるが、山地門のものと比べ、この２つの菱形はどちらも真ん中で途切れている。三地門のものは全てが複雑な百歩蛇の頭文(図 21 左)が用いられたことに対し、こちらは簡略化された百歩蛇の頭文を併用し、途切れの菱形文が用いられる。この簡略化の百歩蛇の頭文や途切れは意図的にされたもので、不完全性をもたらすデザインとして完全なデザインである三地門の菱形より格を下げる意味がある。

三地門の菱形文が第一大頭目を象徴するものならば、こちらは第二頭目のものであると読み取れる*18)。

第一大頭目、第二頭目を象ったものもあれば、パイワン、ルカイ族群の頭目の伝統男性服に第三頭目を象る百歩蛇の頭文も見られる。図 23①は同じく天理参考館に所蔵されているパイワン族群の男性頭目の伝統服である。上述した二枚の頭目服より、高い明度の黄、オレンジ、パールグレー糸が用いられている。図 23②④百歩蛇の頭文は首ぐり、前打合、背中の部分に、図 23③の山形蛇鱗文様は肩、袖口、両脇の部分にサテン・ステッチで仕上げられている。図 23④の構造は図 22⑤と似ており、同じく意図的に途切れの表現が用いられ、更にこの構造の上段には黄、パールグレー、 オレンジ、下段にはパールグレー、黄、 オレンジ色など途切れをはっきりとさせた色分けがなされている。図 23③の文様は第一大頭目、第二頭目の服には見当たらないが、第三頭目の服に現されているのは第一大頭目、第二頭目の服より更に格を下げる意味があると考える*19)。

9）まとめ

本研究では形態類似の分類法を用いて、台湾原住民族の織物における菱形文様の分類を試みた。

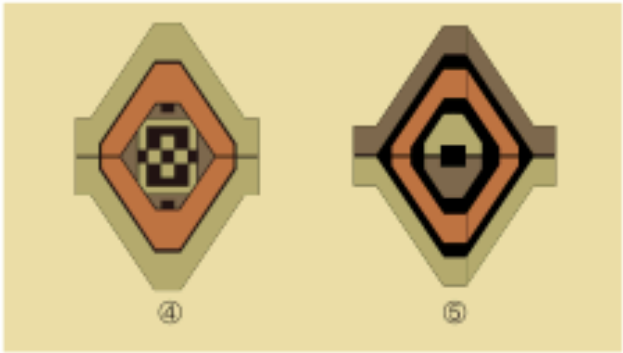
形態類似の分類を通して、本来各種族が持つべき固有文様の形態をはっきり明瞭化させただけではなく、地域差によって作られた文様特色や織物文様のもつ文化的背景要因も読み取ることができた。

そして、幾つかの特定の文様系統は、その使用が特定の種族に限られていることも明らかになった。「横並列正菱形」の文様は主にタイヤル族、アミ族、ピュマ族、パイワン族に使われている。タイヤル族はそれを祖霊の記号として崇め、パイワン族は百歩蛇の鱗と見なし、貴族の身分を象徴するものとして用いた。「横並列正菱形」は種族や地域によってその形態が異なっていた。

一方「増殖正菱形文」は主に、タイヤル族やパイワン族の織物に現れ、タイヤル族の「増殖正菱形文」はパイワン族やピュマ族の影響を受けて、タイヤル族の固有表現(タイヤル族の固有文様の特色は菱形の周りに点々の小文がある)を融合させて作られたものであると思われた。

また、「並列菱形文」は、主にタイヤル族、パイワン族の伝統織物に現れ、タイヤル族はそれを祖霊の眼として表現している一方、パイワン族は擬人化された祖先(百歩蛇)の顔として表現した。

「V 字菱形文」は主にパイワン族に使われ、それは百歩蛇の頭の表現であることを筆者は明らかにした。「X 字菱形文」は主にタイヤル族に使われ、苗栗県泰安郷錦水村の新婦の婚礼衣裳に見た「X 字菱形文」は多色の糸で構成され、複雑な構造を現している。それに対して、南投県仁愛



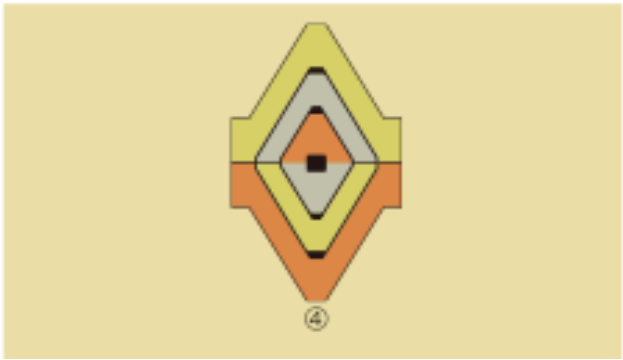


図 22)①パイワン族/男性頭目の伝統服局部/天理参考館。②③④⑤衣服に見た二つ菱形文/採集年:不明、屏東県三地郷三地村/取材日:2011.6.24。

図 23)①パイワン族/男性頭目の伝統服局部/天理大学所蔵。②③④服に現れている菱形文及び山形の蛇鱗文/採集年不明/取材日：2010.7.15(以上筆者作成)。

郷に見た「X 字菱形文」の構造は点から線の形態を形成していくことが特徴である。

「増殖菱形文」においては、タイヤル族は団結の力を、サイシャット族は矮人の魂をも喜ばせることを、ピュマ族は龍の鱗を、ブヌン族は百歩蛇の鱗を、パイワン族は百歩蛇の頭を象ったものとして使用している。特にパイワン族の場合は頭目の階級によって「増殖菱形文」の表現が異なっていることも明らかにした。

本研究では、形態類似分類法を用いて、限られた資料で台湾原住民族の織物における菱形文様の系統化を試みた。菱形文様を系統化させることにより、各族のアイデンティティを確立させることができるだけではなく、各族の信仰観、審美観、社会観、情報伝達観を比較する際、さらに博物館に収蔵された織物の出所を鑑定する際に有効な手掛かりとして役立つと思われる。

本研究の中で取り上げた台湾原住民族の織物に見た「菱形」文様は、膨大な台湾原住民族の織物文様の中のわずか一例に過ぎない。

次回、「方形幾何構造図」に分類された「正方形」「八角星形」「不等辺六角形」「十字形」などの幾何学文様を取り上げ、台湾原住民族の各種族の織物文様の特性を比較しながら、台湾原住民族の織物文様を体系化する方法を探りたいと考える。

註

1）台湾原住民族に関する研究は、伊能嘉矩:『台湾蕃人事情』として台湾総督府民政部文書課から刊行された。鳥居龍蔵:台湾での調査の際、はじめて写真撮影の手法を導入した。また、特に台湾東部の孤島・蘭嶼に住む原住民族・タオ族について念入りな観察を行っていた。移川子之蔵:台湾西岸の漢族系社会と比べて東岸の原住民社会は極めて多種多様であること、部族の系譜や移動歴を記

録・整理、『高砂族系統所属の研究』にまとめた。宮本延人:『台湾高砂族系統所属の研究』移川子之蔵、馬淵東一との共著、台北帝国大学、1935年。吉野清人:『高砂族の祭儀生活 』。馬淵東一:移川子之蔵、宮本延人、馬淵東一との共著した『台湾高砂族系統所属の研究』1935年、『高砂族の分類:学史的回顧 』1953年、『高砂族に関する社会人類学』1954年などの台湾の先住民のブヌン族の社会構造や宗教を研究し数多くの人類学や民俗学に関する著作を著した。鹿野忠雄:『山と雲と蕃人と —台湾山岳紀行—』1941年、瀬川孝吉 :『台湾先住民写真誌』。千々岩助太郎 :『台湾先住民の住居』を研究・再現するなどの功績を遺した。金関丈夫:『南島の人類学的研究の開拓と弥生人骨研究』の業績で朝日文化賞受賞。国分直一:『台湾民俗誌』東アジアの民俗文化研究を評価された。陳奇禄:『台湾排湾君諸族木彫標本図録』。凌純声:『樹皮布印文陶與造紙印刷術発明』において、台湾阿美族にカジノキを用いた樹皮布を製作する技術が発見されたこと、樹皮布文化の起源は中国にある、との新説を発表した。衛恵林 :『台湾ヤミ族の社会組織について』。住田イサミ :『台湾先住民族の刺繍と織物—階層制からみたパイワン群族』などの先行研究名が上げられる。これらの先行研究は、台湾原住民14族の織物の文様を比較、分析する研究が、ほとんどされておらず、単一族の文様のみしか一般論で紹介されていない。本研究では、デザイン学の視点から原住民の織物にみる菱形文様をテーマに取り上げ、各族の菱形文様における共通性、差異性、また台湾原住民族の各種族が本来持つべき菱形文様を読み解いた。

2）台湾原住民族は居住環境、言語、固有文化によって、現在ではアミ族、パイワン族、タイヤル族、タロコ族、ブヌン族、プユマ族、ルカイ族、ツォウ族、サイシャット族、タオ族、クバラン族、サオ族、サキザヤ族、セディック族など14族に分類されている。

3）本研究におけるフィールドワーク調査地はタロコ族(花蓮県秀林郷)、クバラン族（花蓮県豊浜郷)、アミ族（花蓮県吉安郷)、ブヌン族(花蓮県萬栄郷、台東県海瑞郷、南投県信義郷)、タオ族(蘭嶼椰油村、野銀村)、ピュマ族(台東県卑南郷)、ルカイ族(台東県太麻里郷、高雄県茂林郷)、パイワン族、ルカイ族(屏東県来義郷、山地門郷、霧台郷)、セディック族(南投県仁愛郷)、サオ族(南投県魚池郷)、タイヤル族(苗栗県大湖郷 、泰安郷、台北県烏來郷、桃園県復興郷、宜蘭県南澳郷)などを含む。

4）本研究におけるフィールドワーク資料とは、主に調査現地での取材写真、聞き取りなどに基づいて、描き出され文様を対象とし、資料収集場所、年月日などの情報については図3~21のキャプションの中に記す。

5）黄國賓、「台湾原住民族伝統織物の文様分類を試みる」、『台湾原住民13族の伝統的織物の制作技術と文様色彩にみるアジアンデザインの構造比較』、平成21~23年度科学研究費補助金報告書、2012.3。本報告書における「方形幾何構造図」は、台湾の原住民の織物にみられた幾何学文様を「正方形」「正菱形」「八角星形」「菱形」「不等辺六角形」「十字形」などの六つの形態に帰納した。

6）本研究における「正菱形」と「菱形」の形態に見られる「菱形」「正菱形」「横並列菱形」「横並列正菱形」「横重合菱形」「縦並列正菱形」「V 字菱形」「X 字菱形」「増殖正菱形」「横重合正菱形」「増殖菱形」「縦重合正菱形」などの分類用語は、筆者が設定したものである。台湾原住民族の織物にみられる菱形文に対して、分類用語を用いて、定義し、体系的に分析、比較を行なうのは本研究が初めてであり、先行研究では全く触れていない。

7）王蜀桂、『台湾原住民伝統織布』、晨星出版、2004、p.76

8）2010.8.13屏東県來義郷古楼村に在住する蔣梅貞氏による説明である。また、2010.8.16屏東県三地門郷の陳俄安氏に取材を行った時にも同じ説明をしてくれた。

9）『台湾原住民の服飾』、天理教道友社、1993、p201

10）王蜀桂、『台湾原住民伝統織布』、晨星出版、2004、p.105

11）胡家瑜、『賽夏族的物質文化：傳統與變遷』、內政部專題委託研究計畫報告、1996

12）註6王蜀桂、『台湾原住民伝統織布』、晨星出版、2004、p.76の中に言及されているほか、筆者が2010.8.12台東県卑南郷賓朗村に在住するピュマ族の孫菊花に取材するときにも、同じことが言及されている。

13）岡村吉右衛門、『台湾蕃布』、有秀堂、1968、p.52

14）松村明監修、『大辞泉』、小学館、1998

15）、16）『台湾原住民神話與伝説』、台灣原住民文化產業發展協會、2007

17）住田イサミ、『台湾先住民族の刺繍と織物—階層制からみたパイワン群族』、2002、p66

18）、19）2010.8.16に筆者が屏東県三地門郷三地村に在住する陳俄安氏に取材を行ったときに、頭目の伝統服における菱形文の意味、身分を象徴する見分け方について、「第一頭目：菱形の中央に途切れがなく、完全な菱形文が首ぐりから始まり、前打合、肩、袖口、背中、両脇などに刺し込まれている。第二頭目：菱形の中央に横線の途切れがあり、前打合、肩、袖口、背中、両脇などに刺し込まれている。第三頭目：菱形の中央に横線の途切れがあるほか、その構造は第一頭目、第二頭目の菱形よりさらに簡略され、山形蛇鱗文様との組み合わせを現している」と教えてもらった。また、菱形文と身分との関係については、註17）のp.66の中でも紹介されている。

図版出典

1）図1~18　筆者作成

2）写真1　台湾三地門郷の陳俄安氏が所有、筆者撮影

3）写真2　天理参考館所蔵、筆者撮影

4）図19~22　天理参考館所蔵、筆者撮影/作成